



〈前号のあらすじ〉

一郎の剣の師匠十蔵が、幕府から送り込まれたお庭番であることが藩士に知れ渡ってしまう。一郎は師匠の正体に腹を立てながら道場で一人木刀を振っていた。山奥に潜んでいる十蔵もまた、清香と一郎の姉弟を思い悩んでいた。姉弟の父母が命を絶った原因が十蔵の父にあることも知っていた。一郎は幼馴染の三太と竹刀を交え、三太に「十蔵の弟子」を羨ましがられる。一郎は十蔵に会いたいと思う。

「勝負合ったな、水瀬」

十蔵が兵馬に追いつかれたのは険しい山を登りきり、金を掘る坑道の前までたどりついたときのことだった。